**週刊やすいゆたか再刊25号５月12日**

**孫に語る日本の建国物語**

**16．倭国東西分裂と息長帯媛物語**

絵里:12代大帯彦大王(景行天皇)とヤマトタケル王子の間の親子の亀裂は、次の時代の倭国東西分裂への伏線だったとお爺ちゃんは言いたいのね。13代若帯彦大王(成務天皇)とヤマトタケルの子14代帯中彦大王(仲哀天皇)は、同時期に大王であり、志賀高穴穂宮と筑紫香椎宮に分裂していたというわけでしょう。どうしてそれに気づいたの？
志賀高穴穂宮

やすい:私の精子を冷凍保存して22世紀になってからその精子を受精させれば、私の死後百年後に私の息子が誕生することも可能だろう。それと同じようなことが起こっているんだ。つまり景行43年にヤマトタケルが亡くなっている。そして景行60年に景行天皇は崩御された。そして成務天皇48年に帯中彦31歳とある。とすれば政務17年に帯中彦が誕生したことになってしまう。つまりヤマトタケル死後34年にしてヤマトタケルの息子が誕生したことになり、精子冷凍保存技術のなかった当時にはありえないことだろう。

弘嗣:なるほどそれで少なくとも34年は帯中彦の誕生を遡らせる必要がある。そうすれば、13代と14代は同世代ということになり、同時に大王だったことになる。だから滋賀高穴穂宮と筑紫香椎宮という２つの宮があり、倭国は東西に分裂していたことになるという理屈ですね。計算すればそうなるのは認めてもいいけれど、そうなってしまったのは、創作上のミスとも言えますね。つまり12代景行天皇から14代仲哀天皇までは架空の人物であって、つい筆が走って年齢の矛盾に気づかずに書いてしまったのじゃないかな。

絵里:没年が高齢すぎて信用できないから、あまり年齢計算で矛盾を指摘し、その結果東西分裂まで主張するのは説得力が欠けるかもしれないわ。

香椎宮

やすい:先ず、架空説を前提してしまうと単なる創作上のミスになってしまう。しかし歴史には流れというものがあって、景行天皇の筑紫遠征で西日本統合が仕上がったという説が、一番合理的だ。
　そしてその体制がしばらくして熊曾が貢をよこさないとか、出雲が大和に張り合おうとするとかで、揺らいでいたのをヤマトタケルが抑え、蝦夷も不穏な動きがあるので、それを抑え、体制に取り込んでいくのに苦労したことなど、ヤマトタケルに象徴されるような動きも当然あっただろう。それでなんとか三倭国の統合を前提にした国造りが行われてきたが、中央集権化の動きに対する反発や、三倭国にしておきたい高天原・海原の意向もあって、分裂工作が活発となり、東西に別れたことも考えられるわけだ。

弘嗣:これまでの研究では、高天原というのは信仰上の存在ではあるけれど、まさか実際に半島の南端部とは考えていなかった。だから高天原や海原の工作を織り込んでなかったでしょう。そういう意味では倭国を分裂させておこうとする勢力としての高天原・海原連合を取り上げたのはいいアイデアだね、歴史をぐっと面白くしたんじゃない。歴史的事実はどうだったかはおいといて。

気比神宮

絵里:高天原・海原連合の存在で、倭人が厚みを増したわね。少なくとも任那・加羅などからやって来ても渡来人扱いする必要がなくなったわけね。ところでヤマトタケルの息子の帯中彦はどうして倭国を分裂させることになってしまったの。

やすい:それが帯中彦大王は即位２年に息長帯媛を娶って皇后にしているんだ。それより先に、叔父の彦人大兄の娘を大中媛を妃とし、麛坂王子・忍熊王子が生まれている。こっちの方が王族なので息長帯媛が皇后だというのはちょっと怪しい話だろ。そして翌２月６日に角鹿（ツヌガ＝福井県敦賀市）に行き、行宮（カリミヤ＝旅行先の滞在場所の宮）を建てて滞在したとある。これを笥飯宮（[ケヒ](http://nihonsinwa.com/page/127.html)ノミヤ）というようだ。実は息長帯媛は新羅王子天日矛の子孫なんだ。角鹿あるいは笥飯(気比)は天日矛ゆかりの地で、だから皇后の縁故の土地がらなんだ。

３月15日。帯中彦は南国を視察したとされている。皇后とたくさんの官僚は角鹿に留めて、数百人で、軽く出かけたという、即位していることにしたので数百人と書いているが実際は極少人数でということだろうな。
　紀伊国に到着して、德勒津宮（トコロツノミヤ）に滞在したという。このとき熊襲が叛いて朝貢をしないので、それで熊襲国を討とうとしたという。すぐに德勒津（トコロツ）を出発して、海路、穴門（アナト＝山口県豊浦郡）に行った。その日に使いを角鹿に派遣し、皇后に詔してこう伝えたんだ。「すぐにその津から出発しなさい、穴門で会いましょう」

弘嗣:確かに敦賀に長期滞在というのも不自然だね。それも都にもよらずに紀伊に行って、熊襲が貢をよこさないというので、一旦都にも戻らないで、穴門に行くというのも大王らしくない。

絵里:要するにお爺ちゃんは、これはまだ即位前の話で、息長帯媛と結婚した頃に若帯彦大王(成務天皇)から謀反の疑いをかけられて、殺されそうになったので、息長帯媛が一緒に角鹿に逃げて隠れ住んだのではないかというのね。それで命の恩人だから即位の時に皇后になれたというのね。もちろん気比でも安心できないから、紀伊に逃げ、そこから海原倭国の用意した船で穴門に逃れ、直ぐに息長帯媛を呼び寄せたということね。それで筑紫倭国ゆかりの筑紫倭国再興を願う人達に担がれて、倭国西朝を立ち上げたって筋書きでしょう。

弘嗣:何か謀反の疑いのかけられるような怪しげな言動があったのかな？

やすい:それは本人の言動じゃなくて、筑紫に一緒に逃げた武内宿禰の言動が原因だったのだろう。若帯彦大王の取り組もうとした改革は、豪族たちの上下関係をはっきりさせようとするものだ。國郡に長を立て、縣邑に首を置き。すぐにそれぞれの国の幹了（オサオサ）しい者選んで、その国郡の首長（ヒトゴノカミ）に任じるようにという改革だ。

豪族たちの猛反対でどうもうまくいかなかったようだが、その責任を大王は立案者の武内宿禰にとらせようとしたわけだ。そして武内宿禰は帯中彦を祀り上げて、クーデターを企画しているととして両者を捕えて処刑する手筈だったのだ。

絵里：成務天皇の業績に関する記述は少なくて、この長を置いて、豪族を大和政権の身分秩序の中に編みこんでいくというのは大変重大な仕事でしょう。それが実は墓穴を掘ったというお話ね。どうして豪族たちは猛反対だったのですか？

やすい:豪族というのは一定の地域に何らかの形で支配権を行使しているんだが、いままで豪族として直接に大王や各地方の王に服属していたのが、格付けされると、格上の豪族に支配されるようになることが危惧されるわけだな。しかし律令体制になればピラミッド型の支配機構になるので、画期的な改革の取り組みとして記紀には記載されたわけだ。でも最初のうちは激しい反対にさらされただろう。それが分裂の原因になってしまったということだな。

弘嗣：豪族たちは自分がその近辺のお山の大将、王様みたいに思っていたのが、かなり下のランクだったりしちゃうと、頭にくるので、自分の上にランクづけされた豪族を襲って、自分の方が強いところを示そうとして、各地で争乱になってしまったのかな。それで収拾がつかなくなって、大王は責任を武内宿禰に押し付けようとした、おまけにクーデター計画まででっち上げられ、帯中彦まで巻き添えを食ったというのは、ありそうだけど、全くのお爺ちゃんの空想でしょう？ほんとに熊曾が背いたので筑紫に行ったのかもしれないわけでしょう？

絵里： だからお爺ちゃんとしては、どうして息長帯媛が皇后になれたのか、それは帯中彦のピンチを救って角鹿に匿ったからじゃないかとか、角鹿とか紀伊にいたのは 逃げまわって、筑紫に西朝を建てる工作ではないかとか、『日本書紀』の動きから読み取れるということで、それなりの根拠を示しているわけよ。いや別にそれらは自然な動きと思うなら、その根拠を示して反論しないと、元々物証が残ってないわけだから、不自然さを指摘して、その隠された意味を幻視するしかないということなのよ。

弘嗣:そうか、そしたらそのランク付けの改革案に反対するのをけしかけたのは、実は海原倭国の連中で、武内宿禰と帯中彦をうまいこと会うようにしたりして、嫌疑を若帯彦大王に抱かせたのも海原の工作で、息長帯媛と出会うようにし、敦賀に 逃がす手筈とか、紀伊から穴門への水運とかみんな海原のシナリオ通りだったことも考えられちゃうよね。それなら歴史というよりは、歴史物語でありフィクションじゃない。

石塚正英―歴史知の提唱者

絵里:そうなの、その通りなのね。今までそれは史実とはいえない、歴史物語でしょうと言われると、確かにそうだから、それで引き下がってしまう事が多かった、でもお爺ちゃんはそこで開き直るのね。元々七世紀までの歴史は文字史料がほとんどないので、これが史実と言い切るには無理があった、だからせいぜい想像をめぐらして、それらしい歴史物語を語るしかなかった。それなのにそれで史実を語れると思い込んでいた。ところが物証を求められると、決定的なものは出せない。それで真相は分からないでおわってしまっていた。

お爺ちゃんの場合は、実証は確かにできないけれど、歴史の流れと現存する史料からみて、その矛盾を精査して、改作内容を炙りだしましょうというのね。そしてその上でもっとも合理的に納得できる歴史像を作り上げて、了解しておきましょう、そしたらそれが歴史学の主な内容になるというのよ。

たとえそれが歴史物語に過ぎなくても、記紀などの矛盾を突き止めて解決できている分は画期的な進展だという主張ね。それは物証で証明しきれていないし、再現できるような知ではないという意味では科学知ではないけれど、歴史をはっきり見るメガネという意味で、ひとつの歴史知だというのよ。

やすい:そういう意味で、376年頃帯中彦がクーデター騒ぎに巻き込まれて、筑紫に逃げて筑紫倭国の生き残りに担ぎあげられて倭国西朝を建国したこと、倭国の東西分裂が歴史上あったと想定されるということだな。

弘嗣:とすると倭国西朝は高天原や海原が倭国を分裂支配するために造られた国だから、倭国西朝から倭国再統一の動きはないということ？

やすい:どうして?もちろん帯中彦大王(仲哀天皇)は心ならずも謀反の疑いをかけられてのことだし、息長帯媛(神功皇后)も倭国再統一こそが悲願なんだ。ただしこの夫婦にもズレが大きい。帯中彦大王は熊曾を平定した上で、後顧の憂いなく倭国東朝と雌雄を決しようという考え方だったんだけど、何しろ筑紫は山だらけだから、熊曾の抵抗は何時迄も続くわけだ。これでは何世代もかかってしまう。
　 それに対して、熊曾との対決にこだわる必要はないというのが息長帯媛の戦略なんだ。熊曾と山岳で雌雄を決しようにも、それは勝てる見込みはない。それより熊曾とは手を結び、その力を借りて、倭国東朝を攻めたらいいということだな。

絵里:熊曾は長年の宿敵ですよ。それに熊曾にはこれまでも何度も裏切られているので、信用できないでしょう。

弘嗣:熊曾にはまいないや地位や寵愛を与えて仲間に引き入れ、熊曾同志戦わせるというのが大帯彦大王の熊曾工作の基本だったのだから、高天原や海原の力も借りて、分裂工作を行えば成功の可能性はありそうだな。

やすい:対熊曾で手を焼いているときに、高天原の使いとして海原倭国の支配者だった住吉三神が新羅攻めに参戦するように要請に来たんだ。

神楽の住吉三神

弘嗣:ちょっとまった。住吉三神て何？浪速の住吉大社の神様でしょう。それがどうして海原倭国の支配者で高天原の使者になるわけ？

絵里：それがね、住吉大社というのは住吉三神と息長帯媛(神功皇后)を本宮に祀っているのよ。しかも建立したのは息長帯媛自身なの。

弘嗣:そりゃあ可怪しいよ。祀る神が同時に祀られる神だというのは。

やすい:その疑問はすごく重要な疑問で後で問題にするけれど、ともかく住吉大社は新羅侵攻の成功を神に感謝して創建されたんだ。つまり住吉三神が新羅侵攻に大活躍したということなんだ。住吉大社が住之江につくられたのも、そこが海原倭国の水運の拠点である住之江津があったからだな。住吉三神の名前を知ってるかな？

絵里:上筒之男命、中筒之男命、底筒之男命の三神でしょう。伊邪那岐神が三貴神を生む前に、河口で禊をした時に生まれたので、海面・海中・海底の三つの神でしょう。それがどうして壱岐・対馬のある海原倭国の神と分かったの?

やすい:住吉三神はオリオン三連星だというのをウェブで見つけてね。

弘嗣:ええ？海原の神がどうして星なの？

やすい：「筒」は「星」の意味も古代ではあったらしいんだ。それで三ツ星だからオリオン三連星に対する信仰ではないかということだよ。

弘嗣： じゃあどうしてそれが壱岐・対馬という島と結びつくの？

絵里： それはね、倭人にとっては「あめ・あま」という言葉は、天も海も意味していたのよ。だから天に浮かぶ星と、海に浮かぶ島は同一視されるから、オリオン三連星と壱岐・対馬は同一視されるという推理でしょうね。

やすい:全くその通り。それでオリオン座の形を考えると三連星の上に２つ、下に２つ 星があるね。それを壱岐・対馬に当てはめると、朝鮮半島の南端部と筑紫の北端部が含まれて海原倭国が出来上がっていることが分かるんだ。つまり海原倭国というのは海峡の津の連合体のようなもので、半島の南端部の津も筑紫の北岸の津も参加していたと想像できる。半島南端の津は高天原に属しながら海原連合にも 加盟していた。筑紫北岸の津は筑紫倭国に属しながら海原倭国にも加盟していたということだな。既成の排他的な国家の観念は通用しないんだ。

弘嗣:そんな星座の形を見て、歴史を解釈してもいいの、占星術みたいで怪しげだよ。

絵里:五世紀に書かれた『後漢書』倭国伝に倭の奴国は倭国の極南界だという記述があったでしょう。筑紫倭国で考えたら、奴国は倭国の北端に近いけれど、海原倭国だと極南界でいいわけね。

弘嗣：それで高天原の使者として住吉三神だと名乗る壱岐・対馬の統領みたいな男が来て、新羅攻めに参戦を要請にきたわけだね。ということは新羅攻めは元々、高天原の発案だったということなの？

絵里:そういうことが読み込めるかどうか『古事記』に当たってみましょうか？

**「其の大后(おほきさき)息長帶日賣命(おきながたらしひめのみこと)は、時に當りて神を歸（よ）せき。故、天皇、筑紫の訶志比(かしい)の宮に坐しまして、將に熊曾國を撃たんとする時、天皇、御琴を控(ひ)きて、建内宿禰の大臣、沙庭（さにわ）に居て神の命を請いき。是(ここ)に大后、神を歸せ、言教え覺し詔らさくは「西の方に國有り。金銀を本と爲し、目の炎耀（かがや）く種種（くさぐさ）の珍しき寶、多（さわ）に其の國に在り。吾、今、其の國を歸せ賜わん」。
　爾(しか)くして天皇答えて白さく「高き地に登りて西の方を見れば國土を見ず。唯だ大海のみ有り。詐（いつわり）を爲す神」と謂いて、御琴を押し退けて控かず默（もだ）して坐しき。
　爾くして其の神、大いに忿（いか）りて詔らさく「凡そ茲（こ）の天の下は汝の知らすべき國に非ず。汝は一道（ひとみち）に向へ」。是に建内宿禰の大臣白さく「恐（かしこ）し。我が天皇、猶お其の大御琴阿蘇婆勢（あそばせ）」。爾くして稍く其の御琴を取り依せて、那摩那摩邇（なまなまに）控き坐しき。故、未だ幾久しくあらずて御琴の音を聞かず。即ち火を擧げて見れば既に崩り訖んぬ。」**

神功皇后神像

**「その皇后息長帶日賣命は、大事な時に神懸かりになられます。それで、天皇が筑紫の香椎宮におられて、さあ熊曾國を攻略しようとされた時に、天皇は御琴を弾かれまして、建内宿禰の大臣(おほおみ)が沙庭（さにわ―砂の庭）に居て神に命令を下してくださるようにお願いしたのです。それで皇后が神懸かりになられまして、神の言葉を教え覺されてこうおっしゃいました。**

**「西の方に國有る。金や銀で造られた目の炎耀（かがや）くいろんな珍しい寶がたくさんその国にあるのだ。私は、今、その国を大王に服属させてあげましょう」。**

**そうしますと、天皇はこう答えて言われました。**

**「高いところに登って西の方を見ても国の土地など見えませんよ。唯だ大海があるだけです。嘘つきの神ですね」と言って、御琴を押し退けられて弾かずに默って座っておられました。**

**そうしますとその神は、かんかんに怒ってこう申されたのです。**

**「およそこの天の下はお前の支配すべき国ではない。お前なんかもう死んでおしまいなさい」と。**

**それで建内宿禰の大臣がいうに、「ああなんと恐ろしいや。我が天皇(すめろぎ)、なおその琴をお弾きなさいませ」と。そうしてしばらくその御琴を取り依せて、しぶしぶ彈かれました。それで、まだいくらもたたないうちに御琴の音が聞こえなくなりました。さっそくかがり火を掲げて見ますと既になくなられてしまっていました。」**

弘嗣：この沙庭には帯中彦大王と武内宿禰と息長帯媛がいて、息長帯媛に神が憑依したことになっているでしょう。その神に武内宿禰が尋ねるということで、大王は琴を弾いています。住吉三神は立ち会っていませんね。

やすい:ええ、別に立ち会っていたとも、いなかったとも書いていないのだな。この後、直ちに殯 （もがり）宮に移している。それで神に捧げ物をし、こんな不幸なことが怒ったのはタブーを犯したせいではないかと、国中のタブーについてのお祓いをしたりしている。そして神にどうしたらよいか、息長帯媛に神憑りしてもらって尋ねると、「全てこの国は息長帯媛に宿っている御子の支配すべき国である」という返答だったんだ。それで武内宿禰は、そう教えている神の御名を尋ねたんだな。すると「天照大神の御心である。また底筒男・中筒男・上筒男という三柱の大神である」と答えたと書かれている。

絵里： 四柱の神が同時に神憑りするなんて可怪しくない？

やすい:住吉三神は使者として筑紫に来ていたので、住吉三神が予め息長帯媛に会って、高天原が新羅攻めの計画なので倭国西朝も参戦して欲しいという要望を伝えてあって、それを口頭で大王に伝えても承知しそうもないので、沙庭での神懸かりの形を取ろうと示し合わせていたのだろう。だから神懸かりの場面には住吉三神はいなくていいんだ。

絵里：それじゃあさ、海原倭国の工作で帯中彦や息長帯媛を穴門に運んだとしたらその時に上筒之男命は媛を運ぶ船に乗っていたかもしれないわね。それである程度気心が知れていて、大王の考えとかも掴んでいたのかもね。

弘嗣：そうだったら韓流時代劇も顔負けの大スペクタクルだよ。

住吉大社神代記

やすい：全くね。そのあたりの事情は『住吉大社神代記』から窺えるだが、これは目からうろこどころが目玉が飛び出るようなショッキングなことが書いてある。

**「しかれども天皇(すめろぎ)猶信ぜず。以て強いて熊襲を撃つ。勝を得ずして還りぬ。九年庚辰(380年)春二月癸卯朔丁未。天皇(忽ち身を痛めて)明日に崩りたまひき。時に御歳五十二、すなはち神の言葉を用いざれば、早や崩りたまひき。一書に云ふ。天皇親(みずか)ら熊襲を伐つ。賊矢にあたりて崩りたまひき。」**

**「それでも天皇はなお信じようとせず、それで強いて熊曾を攻撃されましたが、勝つこと叶わず戻ってこられました。それは九年庚辰春二月癸卯朔丁未。天皇たちまちに体を壊してあくる日に亡くなられました。時に享年52歳で す。神の教えに従わなかったので早死にされたのです。一書には、天皇自ら出陣されて熊曾を攻撃されましたが、熊曾の矢に当たって亡くなられたとされています。」**

**「ここにおいて神天皇に謂て曰く、「汝(いまし)王(おほきみ)このごとく信ぜずば、必ずその国を得ず、ただ今皇后(おほきさき)の孕める御子、けだし得る有り。この夜天皇忽ち病発し、以て崩りたまひき。ここに皇后と大 神密事(ひめごと)有り、俗に云ふ夫婦之密事の通り。時に皇后天皇神の教へに従はずして、早崩りたまひしを傷みたまひき」**

**「ここにおいて(息長帯媛に憑依した)神は天皇に言われるに、「お前、王よ、今教えてやったことを信じないなら、その国は絶対に得ることは出来ないぞ、ただし、今皇后(おほきさき)が孕める御子が、得ることになるんだ。この夜に天皇は忽ち病にかかり、それで亡くなってしまわれました。それで皇后と大神の間に密事(ひめごと)が有ったのです、(俗に云ふ夫婦之密事の通りで すね。)時に皇后は、天皇が神の教へに従わないので、早く亡くなってしまわれたのはいたわしいことと嘆かれたのです。」**

弘嗣：神の教えを信じなかったので、それで天下を治める資格がないから、死んでしまえと脅されて死んだのか、新羅を攻めよと言われたのに、熊襲攻めに固執して、熊襲の矢に当たって死んだのか、いずれにせよ神の教えに従わないと死ぬ運命だということだね。

絵里：『住吉大社神代記』ではなんと、大王がなくなった日にとは書いていないけれど、恐らくその日にでも密事があった、それは夫婦の密事だと不倫行為を記しているのね。書き込みの形だけど。つまり住吉大社は住吉三神の命令に従わなけれ ば、呪われて死んでも仕方ないという立場で書かれているのね。大王より住吉三神の方が格が上だという立場なのかな。

弘嗣：大王よりも神の方が格上なのは当たり前なのではないの？

やすい︰それは大きな誤解だよ。大王は記紀の世界では天照大神の直系であり、天照大 神の御子という立場で神々と人々を支配するわけだから、住吉三神よりも大王の方が格上として書かなければいけないところなんだ。それに夫である大王が死んだもがりの時に、呪い殺したかもしれない相手とセックスをするなんて最大の不倫であり、大逆行為と言えないことはない。それを敢えて記したところに『住吉大社神代記』の朝廷も恐れない気概がある。だって、元々は高天原、海原は倭人三国を海運で結んでコントロールする立場にあったのだからね。

月延石

絵里:それでこういうバレたら大変な不倫をわざわざ記したのは何故かということで、 気になるのが、15代の誉田別大王(応神天皇)の父親のことなんだけれど、その時の子ではないかという疑いを抱かれかねないでしょう。とすると天皇家は実 は上筒之男命の家系だったことになるわね。それが住吉大社にとってはすごい誇りというか、最大の秘義でしょう。だから『住吉大社神代記』は密書だったのね。

やすい：この密事は新羅攻めへの参加を誓約する聖なる儀礼だったかもしれないね。それで妊娠しているにもかかわらず、自ら息長帯媛は出征することになった。産み月だったので、月延石を壱岐の月讀神社から取り寄せ、帯で出産を抑えての出征だ。それで妊娠している女性は特別の霊力があるとか、おなかにいた誉田別命が生まれる前から戦を指揮したとか、八百万の神々や魚たちや海までも応援したということで、圧勝した話になっている。

好太王碑文の拓本

弘嗣︰本当に新羅侵攻はあったの？『高句麗好太王碑文』は辛卯の年に海を渡って攻めてきたことになっていて、**庚辰**の年から11年目だよね。

やすい：辛卯の年のは二度目の侵攻かもしれない。朝鮮三国の『三国史記』は室町時代にできたもので、古い時代の史料はほとんど残っていなかったから、年代の正確さは期待できないんだ。でも紀元前後から倭の侵攻は記録されていて倭国西朝ま で参戦した侵攻があってもおかしくないね。

弘嗣：あの熊曾との戦いを抱えていて、新羅攻めどころではないという帯中彦大王の気持ももっともな気がするけれど、新羅攻めの参戦を断ったら呪い殺されるほどの義理はあったの？

やすい：その質問はいい着眼だね。確かに高天原や海原には本家意識があって、大八洲の倭国に対して命令口調があるかもしれない。でも命がけの戦争に駆り出すからには、それなりのつながりや借りがあって、断るのは義理に欠けるということでないとね。
　その意味では、対出雲帝国との関係で、出雲侵略を防いでくれたし、大国主命を奇襲して出雲帝国を解体に導いてもらっている。そして磐余彦東征に当たっては支援してもらっているわけだ。
　そして筑紫倭国が熊曾の脅威を受ける中で援助してもらったし、倭国西朝を建国するにあたって大いに支援を受けてきている。だから新羅の台頭で、高天原が存亡の危機になりつつあるのも、筑紫倭国を支援しすぎて弱体化したせいだとすれば、筑紫倭国の再興でもある倭国西朝にとってはとても断れる道理はないわけなんだ。

絵里：でも憑依した神の言葉としては、高天原が苦境だから助けてくれとか、これまでの貸しがあるからここで返してくれとか一言も言わず宝の国あげるから新羅を攻めなさいということでしょう。そんな言い方するから、それはとてもリスクが大きいから遠慮しますとなっちゃうわけでしよう。

やすい：実際はどういう説得をしたのか、分からないけれど、確かに海賊行為をいっしょにやろうと誘っているような調子のところがあるね。新羅による脅威についても、元々新羅を作ったのは大八洲から来た倭人だという伝説があるらしい。自分たちの故国を脅威に晒すなんてけしからんというような正義の観点からの主張もないね。もっとも記紀が書かれた７世紀から８世紀では高天原は天空だから、高天原を守ろうとも書けないわけだな。

絵里：でも妊娠したおなかを抱えて戦にいくなんて、荒唐無稽なお伽話とみなされているようよ。まともな歴史研究者は信じていないのじゃないの？

弘嗣：ちょっと待ってよ、それじゃあ住吉大社はどうして出来たの？創建した息長帯媛が架空の人物なのに建てられたのかよ。それに誉田別大王というのは歴史上の人物だとされているのに、その母が架空というのはどうなのかな？

やすい︰あまり架空にしてしまうと、素性はどうでも良くなって、百済の王子がヤマト王権の養子になったのが応神天皇と継体天皇だという説まで飛び出してくる。架空説にたってしまうと説話に基づいて、神社を創建したことにせざるを得ないね。つまり神功皇后がいて、彼女が住吉大神の助けを借りて新羅侵攻をして、成功したので、住吉大社を作ったという説話があるので、住吉大社を作ったことになる。ではその説話は何時出来て、それに基づく住吉大社は何時誰が創建したのかということになるが、元々住吉大社はあったことにしなければならないから、実際には何時つくったかの記録も残すわけにはいかないことになるね。

絵里:それじゃあ、実際に息長帯媛が実在したとして、ひょっとしたら壱岐の統領の子かもしれない王子を妊娠して出征したとして、産み月にでかけたのに月延石を腹に括りつけてそれでお産を遅らせることができると思う？そりゃあどう考えても無理でしょう。としたら、遅れて生まれたというのは実は嘘だったことになるから、結局帯中彦が死んでから妊娠したことになり、天皇家は上筒之男の子孫だったことになるわよ。

宇佐八幡宮

やすい:そういう心配を実際に奈良時代の皇室もしていたらしいね。だって天皇家の祖先は応神天皇までしか遡れないと考えて、応神天皇が御神体である宇佐八幡宮に道鏡を天皇にしてもいいかどうか伺いを立てている。本当に天照大神の直系と信じていたら、伊勢神宮に伺いを立てそうなものだろう。

絵里:あら天照大神は元々の皇祖神ではなくて、六世紀末までは、月讀命が皇祖神だったとされていたというのがお爺ちゃんの解釈でしょう。

やすい:そうそう、そうだったね。でも息長帯媛は誉田別命は帯中彦の御子だという立場を押し通したので、六世紀末までは月讀命が大王家の皇祖神なんだよ。でも自信はなかったんだな。

弘嗣:それでさ、『古事記』などでは天照大神が憑依したことになっているでしょう。しかし天照大神は高天原にはいないというのがお爺ちゃんの仮説だから、新羅侵攻を命じた神は天照大神ではあり得ないよね。

やすい:もちろんその通りだ。七世紀以降に高天原の支配者は元々天照大神だったことにされたので、この部分も天照大神に差し替えられたわけだな。

絵里:そりゃあ、差し替え仮説が正しければそうだけれど、差し替えがあったというのは証明すべきことであって、前提にしてしまったら独断論の押し付けになってしまうでしょう。

やすい:だから三貴神の誕生や宇気比の文章の矛盾点から、差し替えられた根拠を示したつもりだけれどね。それにこの帯中彦大王が沙庭で身罷る場面でも、「即ち火を擧げて見れば既に崩り訖んぬ。」という表現があるだろう。つまりこの沙庭は火をあげて見ているから、明らかに夜の場面になっている。ということは天照大神が憑依するのだったら、太陽がでている昼間に沙庭をするだろう。わざわざ夜にするのは不自然だね。

弘嗣：そりゃあ一理あるけれど、天照大神といっても自然神である太陽だけではないわけで、現人神の天照大神が高天原の支配者だったら、その霊は夜でも憑依しても可怪しくないとも言えないことはないよ。

絵里：それはどちらとも言えそうね。初めから太陽神だと分かっていたら昼間にしたでしょうが、武内宿禰は答えた神は誰か尋ねているので、分かっていなかった。それで予めはどの神が憑依するか分からずに沙庭を行っていたみたいじゃない、とすると夜にしても可怪しくないし、夜だから太陽神が憑依しないとも言い切れない気がするわ。

やすい:『日本書紀』にはその神の名を聴かれて、すぐには答えず七日七夜に逮(およ)びて、すなわち答へて曰く、神風伊勢国の百伝度会県(モモツタフワタラヒカタ)の析鈴五十鈴宮(サクスズイスズノミヤ)に居る神、名は撞賢木厳御魂天疎向津姫(ツキサカキイツノミタマアマサカルムカヒツヒメノ)命」と天照大神の別名で答えているんだ。しかも一書では「吾名向匱男聞襲大歴五御魂速狭騰尊也」と答えている。「吾が名はムカイツオノコキキソホフイツミタマ ハヤサカルノミコトなり」と読むんだ。折口信夫によると前者は女神で後者は男神だ。それでなんと『住吉大社神代記』は後者の男神の方なんだな。ともかく天照大神と答えるのに一週間かかったことにしているわけだ。これはやはり住吉大社系の人は天照大神の憑依とは認めたくなかったので別名にしたり、男神にしたりして抵抗していた痕跡が、『日本書紀』にも残ってしまったということではないかな。

弘嗣：つまり元の伝承ではこの時に憑依した神は六世紀末まで高天原の主神とされてきたとお爺ちゃんが主張している天之御中主神だったはずだと言いたいのだろう。それに大王家の祖先神は月讀命だった。それで朝廷の沙庭は星や月が出ている夜に行われる習わしだったということだね。

絵里：それじゃあ、新羅侵攻で神に感謝して住吉大社を建てた時には住吉三神と天之御中主神を本宮に祀った筈でしょう。そして七世紀になってから、天之御中主神ではなくて天照大神が憑依したように改めて、天照大神を本宮にお祭りするように 命令されたでしょうね。ところが現在祀つられているのは息長帯媛自身であることになっています。どうしてでしょう。

住吉大社本宮配置図

やすい:恐らく五世紀初頭に住吉大社が創建された時には、住吉三神と天之御中主神を本宮に祀っていたでしょう。それが七世紀の神道大改革にあたり、天之御中主神はすぐ隠れて表立って活動していなかったことしてしまったので、息長帯媛に憑依したはずはないことになったんだ。そして元々主神だったことにした天照大神が憑依したことにしたので、天照大神に差し替えるように朝廷から要望されたんだ。でも住吉大社としては、天之御中主神が本当に憑依したと思って祀っていたわけだから、いくら朝廷の命令でも簡単には聞き入れられない。そんなことをしたら天罰が下って、住吉大社なんか津波で流されたり、落雷で炎上したりするかもしれない。それでどうすべきか、天之御中主神に伺いを立てたら天照大神に差し替えられたら天罰を降すが、朝廷に逆らったら謀反とみなされて住吉大社が潰されるだろうから、創建者の息長帯媛と差し替えるなら我慢するという答だったということにしたというのがお爺ちゃんの推理なんだ。

弘嗣：そんな言い訳、してもいいわけ？(笑い)じゃあさあ、息長帯媛は祀る側だったの祀られているのは納得出来ないと尋ねられたらどう答えたの住吉大社は？

やすい：禰宜の津守氏によれば、住吉大社は住吉三神を息長帯媛が祀るための神社だったのが、息長帯媛が生前に上筒之男命の側にずっといたいと言われていたので、息長帯媛が亡くなられた時に住吉大社が粋なはからいで、上筒之男命の本宮に並べて息長帯媛の本宮を建てたんだということにしたようだ。

絵里：へー、住吉大社は世紀の大不倫に対しても粋なはからいをするのね。

やすい:そのお陰で、壱岐・対馬を身内化することで、高天原を孤立させ、人材も引き抜いて、弱体化させたんだ。五世紀以降は高天原は河内王朝の出先機関に転落してしまう。五世紀以降はだから宗主国や倭人の故地ではなくなった。それで高天原は宗教的な幻想としてファンタジー化され、天空の国として信仰されるようになったわけだ。

志賀高穴穂宮

弘嗣:あれあれ、その前に倭国再統一の話があったのでしょう。

やすい:それが倭国東朝つまり若帯彦大王(成務天皇)の高穴穂宮政権が崩壊したプロ セスは、歴史から消去されているんだ。そもそも東西分裂という事実を記紀は認めていないから、東朝がどのように崩壊していったかの説話は遺すはずがないんだ。おそらく倭国西朝ができたころから、東朝の中に西朝と通じている勢力があって、内部から東朝を崩壊させるとか、西朝と再統合させる動きがあっただろ う。武内宿禰の勢力や息長宿禰の勢力などはかなりの地盤を誇っていたはずだからね。それが新羅侵攻の成功をきっかけに、朝廷内で多数派工作をするとか、破壊工作や暴動などを惹き起こし、治安を悪化させ、行政を麻痺させるなどしていただろう。

絵里：帯中彦大王(仲哀天皇)は、大江王の娘である大中津比賣命との間に香坂王、忍 熊王という二人の王子がいましたね。彼らが潜伏して反乱軍に担がれていたかもしれませんね。反乱軍を討伐にでかけた若帯彦大王が罠にハマって討ち取られて しまって東朝が崩壊したこともありえないですか？

やすい:それはひょっとしたら有り得るね。というのは、息長帯媛は沙庭で神の教えとして媛の身ごもっている子がこの世を支配すべきだと言わせていただろう。それが実は母親の家柄が格上の兄が二人いるわけで、誉田別命のライバルなんだ。それでこの二人の兄を排除しないことには神のみ言葉に反することになる。それで二人の兄を息長帯媛への反乱に追い込んで始末しているんだ。
　つまりこの二人の少年が倭国東朝を片付けた上で、息長帯媛が誉田別命を連れて瀬戸内を上ってくるところを明石で待ち構えて討ち取ろうという体勢なんだ。ところが戦の吉凶を占う猪狩りの儀礼で、兄香坂王が食い殺されたので、忍熊王だけで待ち構えたんだ。

弘嗣:そりゃあちょっと無謀だな。何しろ息長帯媛は、熊襲や新羅を相手に戦ってきて、高天原や海原も味方につけているから、勢いが違うよね。

大和磐余若櫻宮跡

やすい:明石で赤ん坊の誉田別命を捕えようと待ち構えていたんだが、武内宿禰は誉田別命を抱いて、別の船で紀州にまで回って敵を躱したんだ。また忍熊王も善戦して、一時は息長帯媛の方は、降伏したふりをして油断させて敵を討ち取るという苦肉の策も使っている。

弘嗣:子供相手に騙してばかりで、教育上よくないな。

やすい:いや相手もそうとうの参謀がいるだろうということで、それにこちらの誉田別命はまだ赤ちゃんだからね。ともかく勝利して、倭国の再統一を果たして河内王朝の礎石を固めたということだ。こういう戦い様子などもかなり具体性があり、卑怯な手も使っていて、もし作り話だったら、これほど息長帯媛の戦い方を狡猾には表現しないだろうと感じるから、息長帯媛や忍熊王などは実在したように感じるね。

絵里:結局倭国の再統一ができて大和の磐余若桜宮で息長帯媛が統治したようだけど、大王に即位したのかしら、というのは江戸時代までは15代天皇とされていたようなの。それが明治以降に外されたようだけどどうしてなの？

弘嗣：そりゃあ一応前の大王の子が大王になるのであって、妃が嗣ぐと血統的に血はつながっていないことになるだろう。だから摂政だとか即位しないで政治をとる称制だとかになると大王ではなかったことにできるのでしょう。

やすい：弘君のいう通りだね。だから後世の都合で大王でなかったことにしているだけで、当時の人々は大王だと思っていたのだろう。